

Movie Review 8 # 群衆

『群衆』(The Crowd:1928 年)は、キング・ヴィーダー監督によるモノクロ・サイレント映画。サイレント末期米国映画の代表作の一つに数えられている。北村薫氏の著作を読んで、鑑賞することにした。

ある一人の若者の大都会への憧れ、サラリーマンとしての毎日。友人を介しての女性との出会い、結婚して子供に恵まれて送る幸せな日々、夫婦の間にできてしまう距離、家族や職を失う悲しみ、「塞翁が馬」的な現実…平均的な米国市民を主人公として、平和な生活が環境やどうすることもできない周囲の状況の流れによって決定づけられるのを描いた。メアリー役にはヴィーダー監督の妻、夫役は撮影所で偶然監督とすれ違ったエキストラの一人だそう。

ラストシーンについて、映画会社の重役と監督の意見が衝突した。DVD では、コメディ舞台を観ているシムズ夫妻が笑っているところをとらえたカメラがトラックバックし、夫妻がだんだん小さくなって周囲の観客の中に溶け込んでいくというカットになっている。20 世紀初頭の庶民の生活や心情が描写されている。

実は、amazon prime video に 全く異なる物語で、群集心理を主題にしたフランク・キャブラ監督作品『群衆』(Meet John Doe : 1941 年)が挙がっていたので視聴してみた。邦題の付け方に問題があるのではないかな。John Doe とは一大衆である。

ある地方紙 B は経営陣が刷新され、女性コラムニストの A は紙面の「合理化」を理由に解雇された社員の一人となったが、最後のコラムを書くよう指示される。解雇通告に激怒した A は、社会の悪に抗議してクリスマスイブに自殺をすると脅かす架空の失業者「John Doe」からの投書をでっち上げる。この手紙が読者の間でセンセーションを巻き起こす。その A は、架空の人物 John Doe を利用して新聞の販売部数を伸ばそうと画策する。自分が件の手紙を書いたと主張して新聞社に現れた多くの失業者の中から、A と編集長は、元野球選手で故障した腕を治すのに金が必要だった W を John Doe 役に雇う。A は John Doe の名前で一連の記事を書き始め、社会が困窮している人々を無視しているという元の手紙の主旨を詳細に書き綴る。

ラジオを通じて John Doe は全国的に有名になる。その後、John Doe の考え方は国中に広がり、「より良い隣人になろう」という簡素なスローガンを掲げる広範な草の根運動(「ジョン・ドウ・クラブ」)に発展する。しかし、新聞社社長の N は密かに John Doe への支持を彼自身の国政進出の際の支持に振り向けることを

目論んでいた。そんな新聞社社長と W は決裂するのだが・・・最後、追い込まれた John Doe はクリスマスイブに市庁舎の屋上から飛び降りての自殺を企てる。果たして、結末は・・・

第二次世界大戦前の米国。新聞とラジオが絶対的な力を持つ時代に、群衆の力は政治にどう活用されるのか。現代なら SNS に取って代わられているところか。現在米国では、高学歴層が社会を支配する体制に群衆が反発して、それが SNS で拡散し、トランプ大統領就任となったのだが・・・